

マルクスの貨幣生成論

片 山 貞 雄

I . はしがき

筆者は先に、貨幣生成に関するモース (M. Mauss) やポランニ - (K. Polanyi) 等の文化人類学・民俗学的考察から始めて、貨幣生成を取引等経済行動に関連させて分析する古典的代表者とも言うべきメンガ - (C. Menger) の見解を検討した¹⁾。その場合無視できないのは、メンガ - とほぼ同じ年代に、貨幣の生成を論じたマルクス (K. Marx) の見解である。

本稿の目的は、先の機会に果たせなかったマルクスによる貨幣生成論の考察である。しかし、マルクス経済学に明るくない筆者は理解不足や思わぬ誤解を犯しているかもしれない。本小稿は前稿への補論である。

II . マルクス貨幣生成論の特色

一般的に言って、貨幣生成に関するマルクスの論述の解釈は2つに分かれているが、これはこの問題に関する彼自身の論述に明確さを欠くことにもよると言われている²⁾。

つまり、マルクスは貨幣生成の問題を価値形態³⁾ (Wertform) の発展 (『資本論』第1章・第3節) と交換過程 (Austauschprozess) (同第2章) で論じたが、

1) 片山 (2004)

2) たとえば、降旗 (1997) 29-31ページ参照。

3) 価値形態による貨幣生成の展開は主として『資本論』第1章・第3節で行われているが、初版 (1867) と再版 (1873) ではその表示の形式や内容が異なっていることが指摘されている。降旗 (1997) 55ページ参照。なお、荒木 (1994) 12-14ページも参照。本稿で使用する原本の Dietz 版 (版權は1947)、訳本共に、明確な版の記載がないが、第4版 (1890) と判断が可能である。本稿での主な考察対象は第3節であるが、必要に応じて他の箇所も参照した。

後者では価値の実体(抽象的人間労働⁴⁾)をからめた議論になっている。そうすべきであるというのが我が国の伝統的なマルクス経済学者の立場であった。

一方は価値の実体を価値形態の展開にからめれば問題を複雑にしまい、貨幣生成は価値の実体とは別個の問題であり、切り離して論ずることが可能であるという見解⁵⁾であり、同様な見解は海外の最近のマルクス貨幣理論研究にも見られ⁶⁾、筆者もその立場を合理的と考える。

また最近、我が国の近経・非マル経陣営の論者⁷⁾によるマルクス貨幣理論の検討も主として価値形態による貨幣生成メカニズムの分析が中心である。筆者の関心もそこにあり、この問題に焦点をしばらくたい。

周知のように、マルクスは資本主義的生産様式においては商品が富の主要な形態をとることを強調した。そして『資本論』はその分析から始まっているが、貨幣が商品から生まれることを価値形態の展開により論証しようとした。

ところで、商品には使用価値(自然的形態)と価値(交換価値)があるが、マルクスは「商品が自然的形態および価値形態という二重形態を持つ限り、商品として現われる⁸⁾」ことを強調する。商品の価値形態としての交換価値は一方の商品の価値が他の商品の使用価値として表現されるという商品に特有の価値表示の方式である⁹⁾。換言すれば、商品の価値が具体的にどのように表現されるかは他のある商品を媒介として表されることになり、その様式が価値形態である。要するに、価値の物的な担い手として商品を見た場合、ある商品は単独では自己の価値を表現できないが、他の商品との関係を導入することにより

4) Marx (1953) S. 42, 長谷部訳(1951)118ページ。抽象的、人間的労働の簡潔な説明は、三上(1960)283-84ページを参照。一方、マルクスの労働価値論の展開方法の批判的見解については、降旗(1997)45-54ページ参照。この問題は本稿の考察対象外である。なお、竹内(1997)15-16ページも参照。

5) 降旗(1997)54-58ページ、参照。この問題の発端は宇野対久留間の論争であったことは良く知られている。後者が伝統的な見解の代表者で、前者が分離論の代表である。降旗(1997)56-7, 117-19ページ参照。なお、降旗氏は前者の流れに属する。同書から種々啓発を受けたことに謝意を表したい。

6) E. g. cf. Lapavistas (2005) p. 100. 本稿Ⅲ節の展開はLapavistasに負うところが大きい。

7) 岩井(1993), 安富(2000)2章, 吉沢(1981)88, 139-143ページ参照。

8) Marx (1953) S. 52, 長谷部訳(1951)133ページ。

9) 宇野(1964)23ページによる。

始めてそれが可能になる。換言すれば他の商品との関係，社会的関係が重視されるが，価値の担い手である商品は価値の現象形態であり，その意味で価値形態であるが，他の商品との関係を導入することにより始めて，価値形態による貨幣生成の論究が可能となる。

マルクスは究極には特定の商品である金が貨幣となるとするが，価値形態の展開による貨幣生成の論究では，彼は「商品と商品との社会的関係（gesellschaftliches Verhältnis）」¹⁰⁾とか，「諸商品の全面的な社会的関連（allseitige gesellschaftliche Beziehung）」¹¹⁾を強調する。このような視点に注目して，マルクスの価値形態論の目的の1つは貨幣がその素材でなく，商品関係の特異な地位に立つものであることを示す点にあったとする見解¹²⁾も現われているのである。

Ⅲ．価値形態による貨幣生成の展開

マルクスは価値形態の展開を⁽¹⁾単純な価値形態から始め，つぎに，⁽²⁾拡大された価値形態，さらに⁽³⁾一般的価値形態へと進み，最後に⁽⁴⁾貨幣形態で貨幣の発生を論証しようとする。マルクスの展開には，難解な箇所も少なくなく，不十分ではあるが，幾つかの解釈を加えながら論究したい。

(1) 単純な価値形態(詳しくは，単純な，個別的な，または偶然的な価値形態)

マルクスは2つの商品の価値関係が1つの商品にとっての最も簡単な価値表現を提供するとし，あらゆる価値形態の秘密は次の単純な価値形態に潜んでいる，と言う¹³⁾。

×量の商品A = y量の商品B，または，20エレ¹⁴⁾のリンネル = 1着の上着

.....①

10) Marx (1953) S. 52, 長谷部訳 (1951) 133ページ。

11) Marx (1953) S. 72, 長谷部訳 (1951) 163ページ。

12) 安富 (2000) 53ページ参照。同氏は貨幣に関するマルクスの着眼点を評価しながら，労働価値にこだわったために失敗している，という。

13) Marx (1953) S. 53, 長谷部訳 (1951) 134ページ。

14) Elle. 前腕の長さを基にした昔の長さの単位，約50-80cm。

この式で、商品A(リンネル)は能動的役割を演じているが、商品B(上着)は受動的役割を演じている。つまり、リンネルの価値は積極的に上着の使用価値で相対的に表現されるが、一方、リンネルに等価である上着はリンネルの価値表現に材料を提供するにすぎない¹⁵⁾。それゆえ、リンネルは相対的価値形態であり、上着は等価形態である。

ところが、この受動的役割を演じている等価形態の商品、上着にマルクスの強調する価値形態の秘密がある。つまり、ある商品の等価形態は「その商品の他の商品との直接的な交換可能性(unmittelbare Austauschbarkeit)の形態」¹⁶⁾であり、これに貨幣発生之谜を解く鍵があることになる。

このように見ると、マルクスによる(1)式の $=$ は、 $\rightarrow$ でもって表示する方が正確であろう¹⁷⁾。すなわち、

x 量の商品A $\rightarrow$ y 量の商品B, または, 20エレのリンネル $\rightarrow$ 1 着の上着

..... ,

ところでマルクスは、価値形態論での議論を商品間の関係として展開しているが、商品の所有者¹⁸⁾間の関係を入れて考察する方が社会的関係がより明確になると考えられる。以下、このような視点を入れて、上述のマルクスの議論を整理する¹⁹⁾と、'式では、商品A, Bの所有者はそれぞれ極めて異なった地位にある—つまり、商品Aの所有者はAの交換価値がBの一定の比率(y/x)に等しいと宣言し、同時に、商品Bの所有者は商品Bが商品Aと直接交換できることを知らされた—ことを意味する。

15) Marx (1953) SS 53-4, 長谷部訳(1951)134-35ページ。降旗(1997)65ページ参照。

16) Marx (1953) S. 60, 長谷部訳(1951)146ページ。安富(2000)はこの概念を選択権と捉え直す。33-35ページ参照。

17) たとえば, Lapavistas (2005) pp. 103ff, 安富(2000)34ページ以下, 荒木(1994)37ページ以下, および山口(1984)206ページを参照。なお, 降旗(1997)62-63ページも参照。

18) 周知のように、マルクスの価値形態論で初めて商品の所有者を入れて議論を展開したのは宇野氏であった。宇野(1964)23ページ, 宇野(1969)103-06ページ参照, 降旗(1997)56-58ページも参照。

19) Cf. Lapavistas (2005) pp. 103-08.

この等価形態の商品 B が特定の相対的価値形態の商品 A に対し持つ直接的な交換可能性は商品 A の所有者による交換の要求から起こる商品 B の新しい特性である。その源泉は商品 A の所有者の取引行動であり、その新しい特性は市場との関連で生ずる²⁰⁾ことに注意したい。

もし商品 A の所有者が他の商品(等価形態)との交換が可能であるとすれば、取引関係の範囲を拡大するために彼が欲する等価形態の商品のリストを入手しなければならない。これは次の全体的な、または展開された価値形態、(以下、全体的な価値形態と略記)となり、それへの移行が必要となる。

(2)全体的な、または展開された価値形態

この全体的な価値形態は簡単な価値形態の総和である。ここでは『資本論』のように、具体的な商品名と各任意の数量でなく、すべて記号表示にすると、

$$\left. \begin{array}{l} x \text{ 量の商品 A} \rightarrow y \text{ 量の商品 B} \\ x \text{ 量の商品 A} \rightarrow u \text{ 量の商品 C} \\ x \text{ 量の商品 A} \rightarrow w \text{ 量の商品 D} \\ \dots\dots\dots \\ \dots\dots\dots \end{array} \right\} \dots\dots\dots \textcircled{2}$$

この価値形態は単純な価値形態と次の 2 点で異なっている²¹⁾。

(a) 商品 A の単位当たりの(交換)価値は無限の組合せの数量比率；

$\{ y/x B, u/x C, w/x D \dots\dots \}$ となる。

(b) 商品 A に対してだけであるが、他の多くの商品 (B, C, D ……) はある程度の直接的な交換可能性を獲得する。

商品 A の交換価値と他のすべての商品 (B, C, D ……) の直接的な交換可

20) Cf. Lapavistas (2005) p .104 .

21) Cf. Lapavistas (2005) pp .104-06 .

能性は市場を通じてこのような資格を獲得すると言えるであろう。

上述の単純な価値形態と異なり、この全体的な価値形態では、商品Aの所有者と他の商品所有者との間の関係は、より一般的、規則的な慣行に近くなる。しかし、貨幣生成の点から見れば、全体的な価値形態では貨幣の前身とも言える直接的な交換可能性を持つ商品は多数(A, B, C, D.....)であり、その意味では単一の貨幣商品への収斂は起こらない。

貨幣生成の提示の最も困難な問題はどのようにして展開された価値形態から論理的に次の一般的価値形態を導出するかである。事実、マルクスもこの困難を認める次のような趣旨の記述をしている²²⁾。つまり、全体的な価値形態では商品の相対的な価値表現の系列が無限の寄木細工であり、どの商品の相対的価値もこの形態で展開されざるを得ないとすれば、これに照応する特定の等価形態は無数存在することになる。全体的な価値形態は単純な価値形態の集合体ないし総和であり、それぞれ同一の式の反転関係(Rückbeziehung)²³⁾を含んでいる。同様にこの関係から、次の一般的価値形態が得られる。

(3)一般的価値形態

y 量の商品 B → x 量の商品 A

u 量の商品 C → x 量の商品 A

w 量の商品 D → x 量の商品 A

.....

.....

.....

}

..... ③

式から明かなように、それは 式を反転させたものであり、すべての商品 (B, C, D.....) の交換価値は商品Aだけで表わされている。商品Aは他のすべての商品 (B, C, D.....) との直接的な交換可能性を持っているので、

22) Marx (1953) SS .69-70, 長谷部訳 (1951) 159-60ページ。
23) Marx (1953) S .70, 長谷部訳 (1951) 160ページ。一般に、逆関係、逆転(の論理)と
言われている。降旗 (1997) 65, 70ページ参照。

普遍的等価物・貨幣であると言えることができるであろう。

しかしながら、このような単なる反転関係によって形式的に単一の等価形態（商品A）が得られても、形式的にそのようになるだけであって、マルクスによる反転関係の納得できる論理的意味や単一の等価形態（貨幣）に収斂するメカニズムは示されていない。

この反転関係について若干考察してみよう²⁴⁾。

明らかに、 n 個の商品から2個の商品の組合せを造れば、 $n(n-1)/2$ 個の組合せができ、マルクスが良くするように²⁵⁾、相対価値形態を等価形態の反対の極として扱う、つまり $\{x$ 量の商品A $\rightarrow y$ 量の商品B $\}$ と $\{y$ 量の商品B $\rightarrow x$ 量の商品A $\}$ を別個のものとして扱うならば、 $n(n-1)$ 個の組合せとなる。

原理的にはこの全体的な価値形態の反転関係は $(n-1)$ 個の相対的価値形態のどの組合せにも当てはまるが、その場合等価形態は n 個となり、すべての商品が等価形態・貨幣になり、単一の等価形態に収斂する可能性は出てこない。

上述のように、マルクスの全体的な価値形態は単純な価値形態の総和であり、相対的価値形態が同一の商品（商品A）になっているので、全体的価値形態の反転関係である一般的価値形態の等価物（形態）が単一の商品（商品A）になることは当然であろう（ $\square$ 式参照）。

もっとも、上述の組合せによる説明も $\square$ 式の相対的価値形態、または $\square$ 式の等価形態は1個でなくて n 個であることに留意しなければならない。

いずれにせよ、ある商品が単一の等価物（形態）である貨幣の地位を獲得するには、商品所有者間の社会的慣行に訴えざるを得ない。

マルクスも貨幣の生成について、次のように述べる²⁶⁾。「貨幣形態は内部的諸生産物の交換価値の事実上自然発生的な現象形態である最も重要な外部からの輸入諸財貨に付着するか、さもなければ、内部的な譲渡されうる財産の主要

24) Lapavistas (2005) pp.105-06によるところが大きい。

25) E. g. Marx (1953) SS 53-54, 長谷部訳 (1951) 134-35ページ。

26) Marx (1953) S. 94, 長谷部訳 (1951) 198ページ。マルクスのこの記述の指摘は、Lapavistas (2005) p.106に負う。

素たる、たとえば家畜のごとき使用対象に付着する。」このように、貨幣は共同体外部との交換取引または内部の交換取引から発生するとするが、どのような商品が使われるかは偶然であり、家畜や奴隷も一例として挙げている。これらは 民俗学・文化人類学学者の言う原始貨幣 (primitive money) であり、交換取引だけでなく、贈与(これらの学者はこの行為が貨幣を生み出したとする)の対象物であった²⁷⁾。マルクスは商品交換が地方的束縛を越え、「商品価値が人間労働一般の物質化にまで広がって行くのと同じ割合で、貨幣形態は生れながらに一般的等価という社会的機能の上に、貴金属の上に移って行く、²⁸⁾と述べるように、貨幣の社会的機能をその素材と共に重視するのである。

(4)貨幣形態

貨幣形態は商品 A を貨幣商品 C に取り替えたに過ぎず、次のようになる。

$$\left. \begin{array}{l} 1 \text{ 単位の商品 A} \rightarrow u/x \text{ 量の貨幣商品 C} \\ 1 \text{ 単位の商品 B} \rightarrow u/y \text{ 量の貨幣商品 C} \\ 1 \text{ 単位の商品 D} \rightarrow u/w \text{ 量の貨幣商品 C} \\ \dots\dots\dots \\ \dots\dots\dots \\ \dots\dots\dots \end{array} \right\} \dots\dots\dots \textcircled{4}$$

この形態では、他のあらゆる商品の直接的な交換可能性を独占する能力を持つ貨幣商品 C の地位は確立したものになるが、同時に C は交換過程を通じて商品価値を簡単にかつ同質的に(すなわち、貨幣価格として)表わす。

式から明らかなように、各商品 (A, B, D, ……) 1 単位当たりの価値は貨幣商品 (C) の数量で表示され、貨幣商品、たとえば金 $1g = z \text{ 円}$ ²⁹⁾と確

27) 片山 (2004) 2-9 ページ参照。

28) Marx (1953) S. 95, 長谷部訳 (1951) 198 ページ。

29) これはマルクスの価格の度量標準 (Maßstab der Preise) であり、価値尺度 (注45参照) とは異なる概念。Marx (1953) S. 103, 長谷部訳 (1951) 210-11。近経・非マル経では前者の意味で価値尺度の用語を使用している。片山 (1993) 52 ページ参照。

定すれば、各商品の価格が決定される。ただし、これと実際の市場価格が異なることは多いであろう。

ところで、金銀、特に金のような貴金属は耐久性、同質性、分割可能性、携帯可能性等の物理的な理由と、歴史的、社会的慣行から1800年代後半頃から金が貨幣としての地位を確立した。マルクスはこのことを「自然的形態に等価形態が社会的に癒着している独自の商品が貨幣となる」³⁰⁾と言うと同時に、貨幣商品・金の使用価値は次の意味で二重化することを強調する。つまり、金はむし歯の充填や奢侈品の素材として役立つように、「商品としての特殊的な使用価値の他に、独自の社会的機能から生ずる1つの形式的な使用価値を受け取る」³¹⁾と述べ、貨幣の素材と共にその社会的機能を重視するのである。

Ⅳ 価値形態論をめぐる若干の議論

前節でマルクスの価値形態の展開による貨幣生成論を若干の解釈を入れ、敷衍して論じてきたが、単一の貨幣商品・金への収斂のプロセスの論理は説得的ではなく、社会的慣行（歴史的要因を含む）という要因を入れざるを得なかった。上述のように、マルクスもそれに類する言及を行っているのである。

ここで代表的な論者の批判的見解を考察しておこう。

吉沢（1981）は既述の反転を「含意不明の形式的操作に過ぎない」³²⁾とし、「最終的には、商品の関係として表現されなければならない‘価値’に‘一般性’を植えこんでおくことで第三形態〔一般的価値形態〕への移行を論じ、こうした商品の価値性格が、‘すべての他の商品の社会的行動は、諸商品が一般的にその価値を表示する一定の商品を除外する’というかたちの展開を可能にさせた。これらのマルクスの展開を彼の‘貨幣結晶は交換過程の必然的な生産物である’という言に従って、貨幣生成論として理解しようとする‘論点の先取’となるか、アボリアに到達する」³³⁾〔 〕は筆者の補填、原文の「 」

30) Marx (1953) S. 69, 長谷部訳 (1951) 168ページ。

31) Marx (1953) S. 95, 長谷部訳 (1951) 199ページ。

32) 33) 吉沢 (1981) 89ページ。

は「」に変更)というのが同氏の結論である。つまり、マルクスは貨幣が商品から生まれたことを論証できていないことになるが、マルクスの価値形態は交換過程と論理的に異なることには注意が必要である(後述参照)。

同氏は「貨幣的観念は歴史的に生成したものでない」とし、「交換, 商品を支える相互作用の観念と共にア・プリオリに併存したものである」³⁴⁾とする。結局, 同氏の場合, 交換は人間にとって生産行為や言語と共に「絶対的に植えこまれた社会的因子……として存在する」³⁵⁾ことになる。

吉沢氏は文化人類学的な成果も摂取し, 言語と貨幣, 商品との類比を論じ, それから導出される原型の中で, 「貨幣が……規定されることになれば, もはや貨幣は生成するものでもないし発明されるものでもない」³⁶⁾と論ずるのである。

結局, 氏の場合, 太古の時代, 人間社会の出現と共に, 交換(贈与も互惠的という意味で広義の交換)や言語と共に貨幣的観念(物々交換にもある)は存在するので, 貨幣生成の問題はない, と言いたいのであろう。もっとも前節で述べたように, マルクスも貨幣については原始貨幣に属する家畜や奴隷に触れているが, 主たる考察対象は資本主義的生産様式の市場経済である。なお, 氏の貨幣観が名目主義であることは言うまでもないが, 貨幣とは集合表象, つまり人々が貨幣と思うから貨幣であり, 貨幣の側にもそう思わせるものがある³⁷⁾, とするのである。

一方, 岩井(1993)も反転を問題とするが, マルクスの価値形態論では単一の貨幣商品に収斂させることができず, 次の理由で全体的な価値形態と一般的価値形態の間で循環する結果に終わる³⁸⁾, という。まず, 全体的価値形態から一般的価値形態への移行は例の反転によとし, これにより一般的価値形態が成立していると仮定する。すると, リンネル(商品A)が一般的な等価形態

34) 吉沢(1981)143ページ。

35) 吉沢(1981)33ページ。

36) 吉沢(1981)117ページ。

37) 吉沢(1981)1ページ。

38) 岩井(1993)41-56ページ。

となり、それ以外の全商品はリンネル（商品A）に対して直接的な交換可能性を与えていることになる。これは当然、リンネルが他の全商品と直接に交換可能となることを意味する。つまり、リンネルが逆に他の全商品に交換可能性を与えることになり、それは全体的な価値形態において相対的価値形態の商品になることを意味する³⁹⁾、と言う。これは一般的価値形態が全体的な価値形態を可能にすることになり、後者と前者との間の「循環論法」が示された⁴⁰⁾、と結論する。

岩井氏の貨幣形態はマルクスのそれと異なり、一般的価値形態と全体的価値形態との間に（金ではなく、ある国民通貨表示の）貨幣がぶら下る形態で示され、その貨幣形態はこの貨幣をめぐる両形態の間で無限に繰り返される循環構造となる。このぶら下りの形態を氏は貨幣の価値と商品の価値が相互に支えあふ「宙吊り構造」⁴¹⁾と呼ぶ。氏はさらに、価値形態論の推理をもう一歩進めて、商品が価値を持つのは貨幣によって買われるからであり、貨幣が価値を持つのは商品によって買われるからであるとも言う⁴²⁾。

しかしながら、このようなマルクスの価値形態論の解釈は強引であり、前節でも述べたように、価値形態論の＝は→と読み取るべきものであり、等価値形態の商品が直接的な交換可能性を持つ、つまり貨幣、究極には単一の貨幣商品・金となり、その他の商品（相対的価値形態）は貨幣で買われることにより価値を持ち、逆にその商品が貨幣を買うことはできないことを意味している。相対的価値形態であるその商品は直接的な交換可能性は持っていない。両者が直接的な交換可能性を持つとすれば、それは交換過程であり、降旗（1997）の指摘するように⁴³⁾、岩井（1993, 1996）では価値形態と交換過程（物々交換を含む）が区別されていないことになる。ただし、前節で述べた単純な価値形態式で、商品Bの所有者が商品Aの所有者の要求に応ずれば交換は成立する

39) 岩井（1993）52-53ページ。詳しくはリンネルがあくまで可能性として、全体的な相対的価値形態になることを意味する、と言う。

40) 岩井（1993）53ページ。

41) 42) 岩井（1997）150ページ。

43) 降旗（1997）第5講、158-80ページ参照。

が、一般的な交換取引とは異なっている。

さらに岩井(1996)の論ずるところでは⁴⁴⁾、上述の循環構造の中で、個々の商品は生産されて貨幣に買われ、その途端消費財や資本財として使用され、商品世界から消え去ってしまう。ところが、商品世界の中で商品に価値を与える貨幣は商品世界に残り続けることになる。このように貨幣と商品は非対称の関係にあるが、同氏は貨幣は取引の媒体であり、一度も商品世界からは出ることとはなく、それ自身は具体的商品である必要は全くない、とする。

明らかに同氏の貨幣観は貨幣の流通(交換)手段機能を重視する名目主義の立場であり、一般的なマルクス貨幣理論解釈とは相容れないところがある。言うまでもないが、マルクスでは、貨幣とは金(銀も含むが)であり、その第1の機能は価値尺度⁴⁵⁾であり、流通手段は金に代位する紙幣でも良しとする。

ところが、岩井氏にとっては、貨幣とは「その存在のためになんらの実体的根拠も必要としていない」⁴⁶⁾ものであり、何が貨幣となるかは「歴史の偶然」⁴⁷⁾であって、貨幣が貨幣であるのは、氏の言う貨幣形態の中で貨幣の位置を占めているからである。したがって氏の場合、貨幣の生成は論証外ということになってしまう⁴⁸⁾。これは「貨幣とは貨幣の機能を果たしているものが貨幣である」(Money is what money does.) ことと同義に他ならないであろう。

結論的言えば、マルクスの価値形態論を同氏なりに組み替えれば、氏の価値形態論となり、上述の結論が導出されるというのであろうが、マルクスの価値形態論に対する同氏の解釈には無理があるように思える。

44) 岩井(1997)152ページ。岩井(1993)58-59ページも参照。

45) マルクスは、貨幣は人間の労働の社会的化身として価値尺度であり、金が価値尺度として役立ちうるのは、それ自身が労働生産物であるから、と言うように[Marx(1953)S.103, 長谷部訳(1951)210-11ページ], 労働価値ないし価値の実体にこだわった論述である。一方、降旗(1997)は、宇野氏の見解に基づき貨幣所有者が商品を実際にある価格で買うことによって社会的にそれだけの価値のあることが証明されたのであり、その貨幣の機能を価値尺度と言う。86ページ参照。宇野(1954)31ページも参照。マルクスの価値尺度に対する批判的検討については、山口(1984)205-13ページ、また竹内(1997)16-17ページ参照。これらの問題については、いずれ検討したい。

46) 岩井(1993)97ページ。

47) 岩井(1993)98ページ。

48) 岩井(1993)144ページ参照。

一方、宇野理論に立脚して論陣を張る降旗（1997）は、貨幣生成を論証せんとするマルクスの価値形態論の展開を好意的に解釈して次のように説明する。全体的な価値形態において何人かの商品所有者の価値表現で等価形態に立つ共通な商品（たとえば、コメ）が現われ、それがやがて共通の等価物（形態）となり、直接的な交換可能性を持つようになる。その傾向が強まれば、やがてコメを唯一の等価物にするほど収斂傾向は強まる。その結果、あらゆる商品が相対的価値形態になって左辺に並び、そこからコメだけが排除されて等価物として右辺に置かれる。これは形式的には、いわゆる反転であるが、それは結果を見ただけであって、一般的価値形態はあくまで拡大された価値形態の発展の結果である⁴⁹⁾、とする。

しかしながら、同氏の全体的な価値形態から一般的価値形態への発展の根拠になっている「何人かの商品所有者の価値表現で等価形態に立つ共通な商品」の出現も、既述のように、社会的慣行によると言うのと何ら変わるところはない。氏のように「発展」と考えても、マルクスのように「反転」としても、単一の貨幣商品への収斂のためには社会的慣行という同じ条件が必要であると言わざるをえないであろう。

V．むすび

マルクスの価値形態の展開による貨幣生成論の検討や分析は過去多くのマル経・非マル経論者によって行われ、付け加えるものはあまりないかもしれない。本小論は筆者の貨幣生成に関するささやかな学說的検討の上でメンバーと共に、逸することのできない同時代のマルクスによる貨幣生成論を検討した覚書的なものに過ぎない。

たしかに、マルクスは価値形態の発展的展開により商品から単一の貨幣商品（金）の導出を論証しようとしたが、事実上の貨幣形態である一般的価値形態は全体的な価値形態の反転によって求められ、その説得的な論証はなく、既述のように論者によって批判されてきた。本稿で取り上げた吉沢（1981）による

49) 降旗（1997）140ページ参照。

マルクスの価値形態論による貨幣生成の論証は結論先取りであるという論点には肯定できるものがある。一方、マルクスの価値形態論は循環論であるという岩井(1993, 1997)の解釈には上記のように無理がある。

ところで、Ⅲ節で検討したように、マルクスは価値形態の展開によって単一の貨幣商品(金)への収斂の論証に成功していないと思える。その収斂のためには、歴史的要因を含む社会的慣行を入れざるをえない。上述の降旗(1997)の好意的な説明にも、前述のように収斂の条件として社会的慣行と同じ内容の記述を含んでいる。

一方、筆者が前稿で検討したメンガーは交換取引からの貨幣生成を販売可能度(degree of saleableness: Absatzfähigkeit)という概念によって論証しようとした。つまり、販売可能度が相対的に最大の商品が貨幣(交換手段)になるとしたが、相対的により小さい販売可能度の商品をより大きい商品に交換することはその時点、その地域で貨幣として受領されているものに交換することを意味し、貨幣の存在を前提とした立論である、と論じた⁵⁰⁾。

本稿で検討したマルクスの価値形態の発展による貨幣生成論も上述のように、社会的慣行を入れなければ単一の貨幣商品・金への収斂を結論できない。

このように、19世紀の同時代2人の偉大な経済理論家・思想家によっても貨幣の生成は理論だけでは論証できていない。

そもそも貨幣は長い人類の発展史の中で、生み出されたものであり、かりに16～18世紀に形成された資本主義生産様式に入ってからでも貨幣の生成を理論だけで論証することには無理があるのかもしれない。

参考文献

- 荒木迪夫(1994)『貨幣の存立構造』(松籟社)。
 岩井克人(1993)『貨幣論』(筑摩書房)。
 ———(1997)『資本主義を語る』(ちくま学芸文庫)(筑摩書房)。
 降旗節雄(1997)『貨幣の謎を解く』(白順社)

50) 片山(2004)9-17ページ参照。

- 片山貞雄（1993）「金融革新下の貨幣概念に関する覚書」『彦根論叢』（滋賀大学経済学会）283・284号（11月）51-59ページ。
- （2004）「貨幣はどのようにして生まれたか—若干の学說的検討」『大阪学院大学流通・経営科学論集』30巻3号（12月）1-20ページ。
- Lapavitsas（2005）‘The Universal Equivalent as Monopolist of the Ability to Buy,’ in Moseley, F. ed., *Marx’s Theory of Money; Modern Appraisals*（Palgrave）pp. 95-110.
- Marx, K.（1953 ed.）*Das Kapital*, Buch 1（Diez Verlag）長谷部文雄訳（1951）『資本論Ⅰ』（青木書店）。
- 三上隆三（1960）『貨幣的経済理論の研究』（有斐閣）。
- 竹内晴夫（1997）『信用と貨幣；貨幣存立の根拠を問う』（御茶の水書房）。
- 宇野弘蔵（1964）『経済原論』（岩波全書）（岩波書店）。
- （1969）『資本論の経済学』（岩波新書）（岩波書店）。
- 山口重克（1984）『金融機構の理論』（東京大学出版会）。
- 安富 歩（2000）『貨幣の複雑性：生成と崩壊の理論』（創文社）。
- 吉沢英成（1981）『貨幣と象徴：経済社会の原型を求めて』（日本経済新聞社）。